

『貫之集』 卷四の解釈

—素寂本を手がかりに—

北井 佑実子

はじめに

現在、『貫之集』の伝本は、次のごとく大別される。

第一類

①歌仙家集本（九卷八八九首）

陽明文庫本（近・サ・68 九卷八九二首）

東海大学桃園文庫本（九卷八九二首）

村雲切本（巻八と巻五の一部）

②西本願寺本（一〇巻七二七首）

③承空本（七巻九二二首）／御所本（書陵部蔵510・

12 七巻九三〇首）

資経本（下巻のみ 巻六巻七の三一六首）

④素寂本（巻一～巻四の五四五首）

第二類

伝二条為氏筆天理図書館蔵本（九一首）

第三類

伝二条為氏筆大阪青山短期大学蔵本（九一首）
伝藤原行成筆貫之集切（一六葉四〇首）

これらの伝本のうち、近世以降最も流布したのは、第一類⁽¹⁾本の歌仙家集本（正保四年刊）である。片桐洋一氏の『紀貫之全歌集総索引』、萩谷朴氏の『新訂土佐日記』、『私家集大成』⁽⁴⁾、木村正中氏の『土佐日記 貫之集』⁽⁵⁾など、いずれもこの歌仙家集本の本文を底本にしている。また、田中登氏の『校訂 貫之集』⁽⁶⁾、田中喜美春氏、田中恭子氏の『貫之集全釈』⁽⁷⁾は、同じ歌仙家集本系統の伝本である陽明文庫本を底本としている。第一類本は、主に巻の構成により、歌仙家集本系統の他に、西本願寺本⁽⁹⁾（平安後期書写）系統、承空本⁽¹⁰⁾（鎌倉後期書写）系統に分かれる。承空本系統は、従来、御所本⁽¹¹⁾（江戸前期書写）のみが伝わっていたが、平成十年・十四年に、資経本⁽¹²⁾、承空本が紹介され、承

空本は、御所本の直接の親本⁽¹³⁾であると言われている。

このような伝本状況の中で、平成十六年二月、朝日新聞社の冷泉家時雨亭叢書に、素寂本『貫之集』⁽¹⁴⁾が紹介された。上巻(巻一～巻四の屏風歌)のみが伝わる欠本であり、これは、歌仙家集本の巻一～巻四の屏風歌の部分に相当する。本文は、漢字交じりの片仮名の書写。巻末の奥書によると、文永十二年(一二八四)六月七日に、素寂が「靈山本」⁽¹⁵⁾を書写したことが知られる。

この素寂本は、既に、久保木哲夫氏⁽¹⁶⁾、田中登氏⁽¹⁷⁾によって、歌仙家集本系統でも、西本願寺本系統でも、承空本系統でもなく、第一類本の中では新たな一系統として位置付けられている。『貫之集』の伝本中でも、異同には納得出来る面が多く、まことに注目すべき存在なのである。

では、解釈についてはどうだろうか。従来、校訂本や注釈書に使用されてきたのは、全て歌仙家集本系統の本文である。そこに、素寂本を視野に入れると、『貫之集』はどのような解釈が可能になるだろうか。本稿は、第一類本の中でも、新たな一系統として位置付けられる素寂本の本文を、巻四を対象として、歌の解釈の面から考察したものである。

巻の構成

さて、本稿で巻四を取り上げたのは、『貫之集』の全体の構成に基づく。第一類本は、主に巻の構成によって系統が分かれ、歌仙家集本を基準にすると、次のごとくである。

歌仙家集本	巻一	巻二	巻三	巻四
素寂本				
西本願寺本	巻一・巻二	巻二・巻四・巻五	巻三	ナシ
承空本	巻一・巻二	巻二・巻四・巻五	巻三	巻五

素寂本は、系統こそ違いが、巻の構成においては歌仙家集本と一致している。しかし、ここで最も注目すべきことがある。

それは、歌仙家集本と素寂本に関しては、巻一～巻四が屏風歌であり、歌が年代順「延喜五年(九〇五)～天慶八年(九四五)」に配列されていることである。しかし、西本願寺本と承空本系統は、屏風歌の配列が年代順ではなく、共通の錯簡を有している⁽¹⁸⁾。更に、西本願寺本は、歌仙家集本、素寂本に相当する巻四を全て欠いており、従来、第一類本の巻四は、歌仙家集本系統と承空本系統の本文しか伝わっていなかったのである。そこで、その二本の本文が対立した際、どちらの本文で『貫之集』を読むべきか、素寂本はその判断材料になる可能性が考えられ

る。⁽¹⁹⁾

そこで、次章では、素寂本、歌仙家集本、承空本の本文異同と同時に、歌仙家集本系統の本文を底本としてきた、日本古典全書『新訂 土佐日記』、新潮日本古典集成『土佐日記 貫之集』、『貫之集全釈』などの従来の諸注釈と比較しながら、素寂本本文の解釈を考察していく。従来、歌仙家集本系統と承空本系統の本文しか伝わっていなかった巻四を対象とする。

巻四の本文異同と歌の解釈

本文は素寂本、歌番号は歌仙家集本に拠り、素寂本、承空本は平仮名表記に改めた。⁽²¹⁾ 本文の傍線や番号は稿者にて施した。

うみのほとりに風なみをみる

ふくかせにさきてはちれとくくひすのしらぬはなみのはな
にさりける (三七〇)

傍線部：歌仙家集本「こえぬは波の」

承空本「しらぬはなみの」

天慶二年(九三九)四月右大将(藤原実頼)の屏風歌で、風に吹かれて立つ波を花に見立てた歌である。素寂本では、「風に吹かれて立つ波は、咲いては散る花のようであるけれども、

それは、鶯が知らない花であることよ」と解釈出来る。傍線部

「しらぬはなみの」は、承空本と一致している。では、歌仙家集本系統の本文を底本とする注釈書の解釈はどうだろうか。当然、本文は、『全書』『集成』『全釈』ともに、「こえぬは波の」である。更に、何れも、「こえる」の「こえ」を「蹴る」の古語とし、「波の花であるがゆえに鶯は蹴散らすことができない」と解釈している。しかし、詞書に注目すると、「うみのほとりに風なみをみる」とある。つまり、素寂本、承空本の「しらぬはなみの」に拠る、「鶯が知らない波の花である」の解釈が、より適切ではないだろうか。貫之と同時代の平安歌人の歌にも、「こえる」の「こえ」を「蹴る」の古語の意で解釈している例は見出せず、ここはやはり、素寂本、承空本に拠るほうが適切である。また、『新拾遺和歌集』(巻一・一九)に同じ歌が見える。⁽²²⁾

吹く風に咲てはちれと鶯のしらぬは波の花にや有るらん

この歌も、「しらぬは波の」で、素寂本、承空本の本文と一致している。しかし、勅撰集と私家集は作品自体が異なるので、この歌が、根拠となるものではない。あくまでも、後の時代に、このような形で享受していた作品が存在していたということ、参考として挙げる。

⁽¹⁾ をみなへしあるところにかりす

も、くさのはなはみゆれとをみなへし^②さけるなかにをかりくらしむ(三八〇)

傍線部①：歌仙家集本「こたか、り」

承空本「をみなへしあるところこたか、りす」

傍線部②：歌仙家集本「さけるなかに折くらしむ」

承空本「さけるなかにをかりくらしむ」

同じく天慶二年(九三九)四月右大将(藤原実頼)の屏風歌で、女郎花と鷹狩りの取り合わせの歌である。素寂本での解釈は、「色々な花が見えるけれども、おみなえしが咲いている中で狩りをして暮らそう」であり、傍線部②「さけるなかにをかりくらしむ」は、承空本と一致している。注釈書は、『全釈』『全釈』では、「さけるなかに折くらしむ」の本文。『全釈』では、「女郎花」を美女の暗示とし、「女郎花の咲いている中で(一日中)手折って(美女と)過ごそう」と解釈している。しかし、詞書では、「をみなへしあるところかりす」、「をみなへしあるところこたか、りす」、「こたか、り」と、いずれも鷹狩の場面を詠んだ屏風歌であることが認められる。つまり、ここは、

歌仙家集本の「折くらしむ」よりも、素寂本や承空本の「かりくらしむ」が、歌の内容としては適切であると言える。また、『集成』は、御所本(親本は承空本)により、「折くらしむ」を「かりくらしむ」と校訂している。第四句「さけるなかにを」と「さけるなかに」は、どちらでも解釈は可能である。

また、『古今和歌六帖』(第二帖こたか、り)にも同じ歌が見える。⁽²⁴⁾

百草の花はみゆれとをみなへしさけるなかにとかりくらしむ(てん)

この歌も、「かりくらしむ」と、素寂本や承空本の本文と一致している。しかし、類題集である『古今和歌六帖』と私家集である『貫之集』は、作品自体が異なるので、『古今和歌六帖』の歌が根拠となるものではなく、参考として挙げる。

①のやまにはなのきほれる

やまのにはさけるかひなしいろみつ、はなと^②しるへきやとに^③うつさむ(四一九)

傍線部①：歌仙家集本「野山に花の木ほれり」

承空本「やまにはなほへる」

傍線部②：歌仙家集本「しるへき」

承空本「みるへき」

傍線部③：歌仙家集本「うへなん」

承空本「うつさん」

天慶二年（九三九）宰相中将（藤原敦忠）の屏風歌。素寂本では、「山野では美しい花が咲いてもかいが無い、その風情を鑑賞し、（美しい）花だと感じることの出来る宿に（花を）移し変えよう」と解釈出来る。傍線部②「しるへき」は、ここでは歌仙家集本と一致している。ここは、異同が認められるが、ひとまず従来の歌仙家集本の「しるへき」の本文で解釈することにしておこう。むしろ、ここでの問題は、傍線部③「うつさむ」である。これまでと同様、本文は、承空本と一致している。素寂本、承空本の「自分で移し変えよう」という「うつさむ」と、歌仙家集本の「人に植えかえてほしい」という「うへなん」では、勿論、解釈が異なるであろう。注釈書は、『全書』『集成』ともに、「植えなん」の本文である。「植えなん」でも、十分意味は通るが、素寂本、承空本の「うつさむ」の本文でも解釈に問題はない。また、『全釈』は、底本の陽明文庫本により「うつさん」の本文である。

① おとこ女のもとにいきてよふくるまでたちやすらふ
に人にもえあはて

② いて、とふ人もなきかなこよひもやとりさへなきてわれ
はかへらむ（四四三）

傍線部①：歌仙家集本「おとこ女の家にて夜ふか

くなるまでたちわつらひて
人にもえあはてあるに」

承空本「おとこ女のもとにいきてよふる

までたちやすらふ人にもえあは
て」

傍線部②：歌仙家集本「いと、とふ」

承空本「いて、とふ」

同じく天慶二年（九三九）宰相中将（藤原敦忠）の屏風歌で、男が女のつれない仕打ちを嘆く歌である。素寂本での解釈は、「男が女の家を訪ねて行っても、（どなたですか）と家から出てきて尋ねてくれる人もいない今宵も（朝が近くなつて）にわとりまでもが鳴き、私はもう帰ろうか」である。ここでは傍線部②「いて、とふ」に注目したい。素寂本の本文は、承空本と一致している。注釈書では、『全書』『集成』『全釈』ともに、「いと、とふ」の本文。更に、「いと、」を「全く」「全然」とし、「応対してくれる人も全然ないことだ」と解釈する。しかし、「いと、」には、「いよいよ」「いつそう」という意はあっても、「全

く「全然」という意は認められず、やはりここは、素寂本、承空本の「いて、とふ」に拠る「家から出てきて尋ねてくれる人もない」の解釈が、より適切だと言える。

きく^①おひたるかはのほとりなる人のいへに^②女ともあまたかはのつらにいて、あそふ

みなかみにひちてさけれときくのはな^③うつれるかけはな
かれさりけり(四五六)

傍線部①：歌仙家集本「おほくおひたる」

承空本「おほくおひたる」

傍線部②：歌仙家集本「女ともおほくかはつらに」

承空本「女ともあまたかはのほとりに」

傍線部③：歌仙家集本「うつろふかけは」

承空本「うつれるかけは」

天慶四年(九四二)正月右大将(藤原実頼)の屏風歌。素寂本では、「上流に水にぬれて咲いている菊の花だけけれども、水に映っている影は流れさることはないよ」と解釈出来る。ここでは、傍線部③「うつれるかけは」に注目したい。素寂本の本文は、承空本と一致している。注釈書は、『全書』『集成』『全釈』ともに、「うつろふかけは」の本文で、『集成』では、「うつろふ」であるのに、影が「映る」と解している。『全釈』においても同

じく、「うつろふ」を「映る」と解し、「菊の露は流れても、映り続ける影は流れず、移ることは流れない」とする。しかし、こは、「水に菊の花の影が映っていて、それが、流されることはないよ」といった歌であり、菊が永遠の意で表現されるということも含め、「なかれさりけり」ではないだろうか。やはり、素寂本、承空本の「うつれるかけは」の本文が、歌の意味としては通りがよいと考える。

やまふき

うつるかけありと^①おもはずみなそこの^②はるとそみまし

やまふきのはな(四六五)

傍線部①：歌仙家集本「思へは」

承空本「おもはずは」

傍線部②：歌仙家集本「物とそ」

承空本「はるとそ」

天慶四年(九四二)三月内裏の御屏風の料の歌。素寂本では、「もし、山吹の花が水に映って見えたと思わなかつたら、水底にも春がやってきたと見ただろう」と解釈出来る。つまり、山吹の花が水に映って見えたので、水底にも春が来たのだと思いましたが、という歌になる。傍線部①「おもはず」は、打ち消しの表現があることでは、承空本の本文に近いと言える。注釈

書は、『全書』『集成』『全釈』ともに、「思へは」の本文で、いずれも、「山吹の花が水に映っていると思っているので、水底に山吹の花が咲いていると見るのであろう」と解釈する。しかし、第四句に反実仮想の助動詞「まし」があることから、傍線部①は、承空本の「おもはずは」が適切であると言える。歌仙家集本の「思へは」では、解釈が成り立たないのである。傍線部②「はるとそ」の場合は、承空本と一致している。こちらは、どちらの本文でも解釈は可能であろう。

また、『古今和歌六帖』（第六帖 山ふき）に同じ歌が見える。うつるかけありとおもはずみなそこにはるとそみまし山ふきの花

素寂本、承空本、と本文がほぼ一致している。参考として挙げておく。

の、はなをみる

おくつゆやはなのいろことにそめわけてあきの、へをは人
にみすらむ（四七九）

傍線部：歌仙家集本「秋の暮とは」

承空本「あきの、へをは」

同じく天慶四年（九四一）三月内裏の御屏風の料の歌。素寂本では、「秋の野辺に咲き乱れた花を見て、置く露がひとつひとつ

つの花を染めわけて、その美しい野辺を人々に見せてくれているのであろうか」と解釈出来る。傍線部「あきの、へをは」は、承空本と一致している。注釈書は、『全書』『集成』『全釈』ともに、「秋の暮とは」の本文で、「秋の最後の美しさ」や、「秋が終わることよって、人間の心の飽きも終局をむかえている」と解釈する。しかし、詞書に「の、はなをみる」とあるので、こは、人間的な問題が介入する余地はなく、ただ単に、秋の野辺の美しさを詠んだ歌ではないだろうか。やはり、歌仙家集本の「秋の暮」よりも、素寂本、承空本の「あきの、へ」が適切な解釈が出来ると言える。

①おなし八年たいりの御屏風のうた子のひいへにて

わかゆかて②こ、にしあれは、るの、のわかなもなにもか
へりきにけり（五二三）

傍線部①：歌仙家集本「おなし八年二月うちの御屏

風のれう甘首 家にて子の
ひしたるところ」

承空本「同八年うちの仰にて屏風哥」

傍線部②：歌仙家集本「た、にしあれは」

承空本「こ、にしあれは」

天慶八年（九四五）二月内裏の御屏風の料の歌。素寂本では、

「私は野に行かず、家でじっとしていたので、春の野の若菜にしてもなににしても、人々が持つて帰ってきてくれた」と解釈出来る。ここでは傍線部②「こ、にしあれば」に注目しよう。

素寂本の本文は、承空本と一致している。注釈書は、『全書』『集成』『全釈』ともに、「たたにしあれば」の本文で、「ただしっとしていたので」、「ひたすら何もしないでいたのだ」と解釈する。しかし、詞書に、「子のひいへにて」「家にて子のひしたるところ」とあることから、素寂本、承空本の「こ、にしあれば」に拠る、「ここで（家で）じっとしていたので」の解釈の方が、場所の特定が可能になり、適切ではないだろうか。

おわりに

『貫之集』巻四⁽²⁵⁾における八例の歌の解釈を、素寂本を核として検討してきたが、同様の例は、同じ巻四でも他に多く確認出来る。しかし、僅か八例のみでも、素寂本を視野に入れて『貫之集』を読むと、従来とは異なった解釈が可能になることが確認出来たのではないだろうか。

歌仙家集本系統、承空本系統（御所本系統）の本文しか伝わっていないなかった巻四は、素寂本を新たな対校本文として考慮に入

れるべきであろう。本稿で示したのは、ほんの一部分ではあるが、歌仙家集本系統の本文の誤りを訂正出来るという面でも、素寂本の存在は重要である。⁽²⁶⁾

従来『貫之集』の注釈書の底本は、いずれも歌仙家集本系統の伝本が使用されてきた。しかし、素寂本の出現により、その解釈には再検討が必要であろう。

〔注〕

(1) 『貫之集』第一類本は、田中登氏により、その根幹部分は自撰本であると認識されている（『校訂 貫之集』和泉書院 昭和六十二年二月）。

(2) 片桐洋一氏監修『紀貫之全歌集総索引』（大学堂書店 昭和四十三年八月）。

(3) 萩谷朴氏 日本古典全書『新訂 土佐日記』（朝日新聞社 昭和四十四年三月）。

(4) 和歌史研究会編『私家集大成』第一巻（明治書院 昭和四十八年十一月）。

(5) 木村正中氏 新潮日本古典集成『土佐日記 貫之集』（新潮社 昭和六十三年十二月）。

(6) 注(1) 田中氏著書。

(7) 田中喜美春氏 田中恭子氏『貫之集全釈』(風間書房 平成九年一月)。

(8) 歌仙家集本系統の他の伝本は、室町書写の陽明文庫蔵本、江戸初期書写の東海大学桃園文庫本(東海大学桃園文庫影印叢書『貫之集・伊勢大輔集・周防内侍家集・前斎院御百首』東海大学出版会、平成二年九月)、零本または断簡として伝わる平安末期書写の村雲切本(零本は、冷泉家時雨亭叢書第十四卷『平安私家集一』解題は田中登氏朝日新聞社、平成五年二月)である。村雲切本は、杉谷寿郎氏により、歌仙家集本系統の根本的な役割があると位置付けられている(「歌仙家集本系貫之集の本文の成立―村雲切・定家筆貫之集切との関係から―」『論叢王朝文学』笠間書院、昭和五十三年十二月)。

(9) 『三十六人家集』(三十六人家集刊行会、昭和九年八月)複製本。

(10) 冷泉家時雨亭叢書第六十九卷『承空本私家集 上』解題は田中登氏(朝日新聞社、平成十四年八月)。

(11) 橋本不美男氏編『御所本三十六人集』「貫之集 上・中・下」(新典社、昭和四十五年六月)影印本。

(12) 冷泉家時雨亭叢書第六十五卷『資経本私家集一』解題は

樋口芳麻呂氏(朝日新聞社、平成十年二月)。
(13) 注(10) 田中氏の解題。

(14) 以下、「素寂本」と称する。素寂本の書誌については、冷泉家時雨亭叢書第七十二卷『素寂本私家集 西山本私家集』解題は久保木哲夫氏(朝日新聞社、平成十六年二月)に詳しい。

(15) 「靈山本」については、福田秀一氏『中世和歌史の研究』(角川書店、昭和四十七年三月)に詳しい。

(16) 注(14)の久保木氏の解題。

(17) 田中登氏『素寂本貫之集の意義』(関西大学文学論集)第五十四巻 第一号、平成十六年七月。

(18) ここで述べる「錯簡」とは、綴じ違いや脱落ではなく、屏風歌の歌序が年代順ではないということである。

(19) 注(17)の田中氏の論でも既に指摘がある。
(20) 使用する注釈書

注(3) 萩谷氏著書。底本は歌仙家集本。本文中の略号は『全書』。

注(5) 木村氏著書。底本は歌仙家集本。本文中の略号は『集成』。

注(7) 田中氏著書。底本は陽明文庫本。本文中の略

号は『全釈』。

なお、萩谷氏の著書は、御所本（親本は承空本）が紹介される以前の注釈書である為、参考程度にとどめる。

(21) 素寂本の本文は、注(14)の冷泉家時雨亭叢書に拠る。

歌仙家集本の本文は、正保四年刊版本『歌仙家集』に拠る。承空本の本文は、注(10)の冷泉家時雨亭叢書に拠る。

(22) 本文、歌番号は『新編国歌大観』に拠る。

(23) 詞書に関しては、後の手が加わり改変されることがあるので、ここでは、異同を示す程度にとどめる。以下、詞書の異同例に関しては同様の措置をとる。

(24) 本文は、図書寮叢刊『古今和歌六帖 上巻 本文編』（宮内庁書陵部 昭和四十二年）に拠る。

(25) 本稿では、巻四のみを取り上げたが、巻一―巻三についても同様の結論が出る可能性は十分に考えられる。今後の課題としたい。

(26) 『貫之集』第一類本は、同一祖本から派生しながら、錯簡がある伝本とない伝本に分かれてきた。その錯簡がない素寂本と錯簡がある承空本とが同じ本文を有していると

いうことは、それが、本来の姿を伝えている可能性が極めて大きいと言えよう。

〔付記〕

本稿は、平成十八年七月二十二日に開かれた関西大学国文学会での口頭発表に基づくものである。発表時、種々御教示くださった方々に、厚く御礼申し上げます。

（きたい ゆみこ／本学大学院生）